

観察記録 (Observation)

福岡県産地下生菌の観察記録

Observations of hypogeous fungi in Fukuoka Prefecture, Japan

岩間 杏美

Ami Iwama

福岡県福岡市南区

Mimami-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka, Japan

E-mail: amitake85@outlook.com

Article Info: Submitted: 8 December 2020 Published: 31 March 2021

1. はじめに

図鑑を眺めながらきのこの勉強をしていた時、イボセイヨウシヨロ（広義）のページが目にとまりました。

「トリュフは日本にもあるんだ。」

新しい知識と、ワクワク感はより一層“きのこ探し”を楽しませてくれました。しかし、その当時の私は一向にトリュフを見つけられる気配もなく、夢の話なんだとあきらめていました。それでも諦めずに思い続けていると、あるチャンスが巡ってきたのです。それは地下生菌を探している波多野英治さん・敦子さんご夫婦との出会いでした。ご夫婦は初めて会った私に地下生菌のことについて教えてくださいました。そして、その時に初めてトリュフを見ることができたのです。

「私も地元で地下生菌をたくさん探してみます！」

感動と楽しみを胸に、地元での地下生菌探しが始まりました。

2. 初めて見つけた地下生菌

地元に戻ったのはいいものの、探し方が分からない…。さて、どうしたものか。以前ご夫婦から探し方や生息環境について話を聞いていたのですが、いざ、自分で探すとなると全く感覚をつかむことが出来ませんでした。とりあえず、この時期によく見られるヒラタケやエノキタケを収穫しながら山道を歩いていました。あと、200 mほどで山頂につきそうです。結局地下生菌を見つけることができず、落ち込んでいました。お昼休憩を挟み、来た道に戻っている途中に地面からなにやら棒のようなものが突き刺さっていました。

「なんで、こんなに棒がささっとるん？」

その場にしゃがんで、近くで見ると、硬い地面から空に

向かって伸びている棒は先端に丸いマッチのようなものをつけていました。

「やばっタンポタケやん!？」

そのきのこは、図鑑で見ている「タンポタケ *Tolypocladium capitatum* (Holmsk.) C.A. Quandt, Kepler & Spatafora」にそっくりでした。ということは、地中に寄生されたツチダンゴの仲間がいるのでは？そう思い、地面の土をやさしく取り除いてみると、コロ、コロといくつも黄土色の丸いものが転がり出てきました。ひとつ手に取り、ハサミで断面を切ってみると、中心はこげ茶色でその周りには白い網目状の模様が付いていました。表面の皮には凸凹がはっきりとついており、その隙間には植物の根のようなものがびっしりと付着していました。調べてみると、そのツチダンゴの仲間は「アミメツチダンゴ（ワナグラツチダンゴ） *Elaphomyces muricatus* Fr.」らしいことが分かりました。初めて自力で見つけることができた地下生菌でした。

3. 福岡県内で見つかった地下生菌について

福岡県内ではきのこについて興味を持っている人たちは多いですが、地下生菌を専門に興味を持っている人は少ないように感じられます。そのため、福岡県内の地下生菌発生状況はよく分かっていないのが現状です。

福岡県は温帯性気候で適度の雨量があり地域によって様々ですが、内陸には盆地があり夏期と冬期の温度差が大きい地域や、冬期に積雪が見られる地域もあります。植生については、森林面積の約半分は人工林（スギ・ヒノキなど）が占めていますが、各所に広葉樹林帯も広がっており、標高約 800 m を境に、上の方ではブナ・ミズナラなどの夏緑林帯、下の方ではタ

ブ・シイ・カシ・ヤブツバキなどの照葉樹林帯になっています。これまで見つかった地下生菌のなかでは、主にシイ・カシ林内でウスベニタマタケ *Turmalinea persicina* Orihara やジャガイモタケ *Heliogaster columellifer* (Kobayasi) Orihara & K. Iwase、アミメツチダンゴが多く見られます。特に、アミメツチダンゴに関しては、低地から1000 m級の山々まで幅広い環境で観察することができました。その他にも様々な種類の地下生菌が見つっていますが、頻度は上記の種に比べると少ないようです。

これまで、観察してきた地下生菌について絵で描いてみました(図1)。

5. おわりに

昨年(2019年11月4日)に溪流沿いを歩いていると、今まで見たことがないきのこに出会いました。それは白くて丸く、よく見ると絹のように菌糸が絡みついており、一見何かの地下生菌のようにも見えましたが、菌糸の塊のようにも見えました。ひとつ手に取って匂いを確認してみると、その不思議なものからは強烈なおいが漂ってきていたのです。

「これは地下生菌だろう。」

そう確信した私は、持ち帰ってじっくりと観察することにしました。しかし、胞子も無ければ、図鑑にも載っていない…当時は「知



図1. 福岡県で見つかった地下生菌.

る」手段が見つかりませんでした。来年の発生を願って、定点観察を行うことを決めました。

発生地には1ヵ月に一度訪れてみました。変化が出始めたのは2020年10月30日で、菌糸の塊が発生し始めていました(図2)。



図2. 地下生菌に似た不明菌の子実体原基.

その後は2週間に一回のペースで現地を訪れては観察を繰り返していました。2019年の発生時にも、標本を解剖して観察していましたが、今回ようやくきれいな個体が見つかりその正体が少し判明してきました。白い塊の断面はまるできのこが凝縮し



図3. 上述の不明菌の断面. セコチウム型であることが確認できる.

たような形(柄が内蔵されていて、ヒダもぎっしり。)でした。この姿はセコチウム型菌にそっくりだったのです(図3)。

この瞬間、貴重なきのこに間違いのないことを確信し引き続き観察を行いました。

11月15日、前回の発生地よりやや下の場所を探していたところ、図1,2のきのこと同様に白い菌糸で覆われた、変わった姿のセコチウム型菌を見つけることができました(図4)。



図4. 発達した柄を持つセコチウム型子実体.

この子実体には明らかに長い柄があり、その近くにはクヌギタケ型のきのこも見つかりました。実は、昨年発生地にはクヌギタケ型のきのこが観察できており、その時は未熟で胞子も確認できなかったため、前述の不明菌との関係性はないだろうと考えていました。今回、念のため、クヌギタケ型のきのこを持ち帰って胞子を調べてみると、それはイッポンシメジの仲間らしきことが判りました(図5)。

このセコチウム型菌とイッポンシメジの仲間の関係性は今のところ分かりませんが、これまで、この不明なきのこは福岡県の他に神奈川県、山梨県、岐阜県、長野県などで発生が確認されているとのことです(折原・山本、私信)。今回見つかった



図5. セコチウム型菌と、その近くで見つかったイッポンシメジの仲間.

セコチウム型菌とイッポンシメジの仲間に関係性があるのか、今後の研究の進展が気になるところです。もしかしたら皆さんが住んでいる地域にもひっそりと生息しているのかもしれませんが…。今度山にきのご探しに行く際には、ぜひ探してみてください。

謝辞

今回の出来事に関して、木下晃彦氏、折原貴道氏、佐々木廣海氏、山本航平氏には標本に関するご意見をいただきありがとうございました。また、今回ご紹介したセコチウム型菌を「知る」きっかけをくださった金子義紀氏には大変感謝しております。この場をお借りして感謝申し上げます。